

平成29年12月5日(火)

老球の細道375号

## 落ち葉につぶやく

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「落ち葉の舞い散る 停車場は  
悲しい女の吹きだまり  
だから今日もひとり 明日もひとり  
涙を捨てにくる♪」

昭和歌謡曲の名作、奥村チヨの『終着駅』の一節である。私と同じ世代の団塊の世代の人々には忘れられない名曲だろう。小悪魔的な奥村チヨのセクシーさと哀愁に満ちた歌詞は今でもフラッシュバックされる。この曲を作詞したのは千家和也。男の作詞家だから、歌詞の中に出てくる女の気持ちは、実は男の気持ち。落ち葉を最初に意識した曲である。

今日も晴天だがちょっと肌寒い午後、毎日のルーティーンであるジョギングにいそしんだ。今では歯を磨いたり、風呂に入ったりと同じような習慣になってしまったので、走らないと気分が悪い。何事も習慣になってしまうと苦痛に感じない。周囲から「良く走りますね」なんて感心されるが、習慣なのでやらないほうが大変だ。気分も悪い。

ジョギングコースには赤や黄色の落ち葉が目につくようになった。最近体調が良くなってきているのかわからないが、かなり動いても苦にならない。腰痛からくる座骨神経痛の痛みもなくなり、落ち葉に関心がいくくらい余裕が出てきた。以前は、痛みがいつ出てくるか、どのくらいまで走れるかなど自問自答のジョギングであったが、今は余裕がある。落ち葉に鼻歌で声をかけている。「落ち葉君さよなら♪さよなら落ち葉君♪」。今は亡き坂本九の名作「涙君さよなら♪」のアレンジである。

ノーベル賞文学賞を受賞した『夜と霧』は、収容所でただ死を待つだけのユダヤ人たちの日常生活を描いたドキュメンタリー作品である。その中には、木から落ちる落ち葉を見ながら詩を作ったり、絵を描いたりして死を待つ絶望の時間をつぶす姿が描かれている。そんな遊び心を持った人々だけが絶望の地獄から這い上がり、死を免れたという。

私はそんな大げさなことではないが、色々なことをつぶやく。A高校退職前のつぶやき。「落ち葉君、私と同じだね。役割を終え人知れず散り去っていく。老兵は消え去るのみ。君は散り去るのみか。来年は会えないね。君はまたゾンビのように、今ある木々からキリストのように復活できるが、私はだめだよ。来年ここに来て君を見ながら走っていたら大変なことになるよ。不審者と間違えられちゃうよ。今だかつて退職後に、勤務していた学校に来てトレーニングしているなんていう先生は聞いたことないよ。え、誰もいなかったらやってみる価値がある？冗談は美子さん。来年からは自宅近くの田んぼに落ちている君の友達の落ち葉君を眺めながら走るよ。君の恋人もいるかもね。なんちゃって」。

落ち葉君とテレパシーで会話をしながら学校のグラウンドで走っていた頃が懐かしい。日増しに体調は良くなっていくのか。心がけるのは現状維持をキープするという消極的な姿勢ではなく、もっと向上させること。絶対に加齢を言い訳にしないこと。

加齢は、部活の練習に例えると「ラスト！ラスト1本！」の状況である。ラスト、終わりを意識するとがんばれた。後がないことは、寂しく、空しくもあるが、今まで眠っていた「而今」の龍が目覚めます。落ち葉君ありがと。背水の陣が敷けそうだよ。